

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 総則部会

## テーマ

## 『地域や家庭と連携した教育課程の推進 ～生徒・保護者・地域から信頼される学校を目指して～』

## 提案概要

提案校では10数年前、生徒指導に大きな課題を抱えていた。それをきっかけに保護者が立ち上がり、「おやじの会」の設立、また学校・家庭・地域の三者連携活動など、地域連携事業が行われるようになった。しかし、学校評価アンケートなどを見ても肯定的回答はなかなか増えず、教育連携活動全般の見直しが繰り返し行われてきた。

ここ数年では、保護者連携や地域連携の改善と強化、また、地域の幼保小中高との教育連携も充実させ、学校を中心に保護者、地域、近隣の学校が一体となって子ども達を育てていけるよう、活気あふれる連携活動を推進している。

## 「実践の概要」

### 1、保護者との連携

- ・おやじネットワークとの連携
- ・PTAによる校内美化の取組

### 2、地域との連携

- ・地域調べ
- ・2年次における農業体験
- ・地域のイベントやお祭りへのボランティア参加

### 3、地域幼保小中高との教育連携

- ・近隣保育園への保育実習
- ・学区内の小学校6年担任の先生を招いての公開授業・情報交換
- ・学区の小学校との教員交流、児童・生徒の歌の交流会
- ・高校を招いての進路ガイダンス
- ・隣接している高校の授業見学・学食体験

## 「成果」

地域や家庭と連携した教育活動を行うことで、生徒が保護者や地域の方とかかわる機会が増加し、様々な大人と主体的・協働的に取り組む機会も増加した。それによって達成感を味わう機会が飛躍的に増え、生徒たちの心の成長につながっていった。

また、保護者や地域との連携は、最終的に教師の授業力の向上や保護者の意識の向上など、学校の活性化につながっていった。目に見える成果としては、学校公開日や授業参観日における保護者や地域住民の授業参加数が年々増え、現在では、教室に入りきらないほどの参観者が来校している。

学校評価アンケートについても、生徒、保護者ともに学校への肯定的な評価が増え、生徒・保護者から信頼される学校に近づいていく結果となっている。

## 「課題」

### ・教員と地域との温度差

地域の方や保護者、おやじネットワークにおいては、母校への思い入れが大変強い。一方で教員は毎年入替わり、次第に新しいメンバーになっている。学校が落ち着いてくる中で、連携活動の必要性に疑問をもつ教員も少なくない。

### ・教員の負担・働き方改革との兼ね合い

地域との連携活動の打ち合わせは、毎回勤務時間後や休日に行われるうえ、一部の教員に負担がかかり過ぎていることが多い。教員の働き方改革が叫ばれる昨今、新学習指導要領の実施時期も重なるということで、これを機に学校と地域のかかわり方にさらなる工夫が必要な時期に差し掛かっている。

## 質疑応答

- Q おやじネットワークについて、生徒が卒業しても保護者はその後も所属することが可能ということは、幅広い年齢層の人たちで構成されることになり、古くからいる人たちと新しく入った人たちとでうまくいかないことも起こるのではないか？
- A おやじネットワークの代表者は、子どもが在籍している保護者に限っており、古くからいる人はバックアップに回ることが徹底されているため、そういう摩擦は生じていない。
- Q 教員がかかわらなくてはならない部分も多く、負担となっているのではないか？ また、働き方改革に相反することも多いのではないか？ そこに対する対応は何かあるのか？
- A 縮小化の意見が出ている。現段階では、学年で分担するようにしており、職員の細分化を行っている。
- Q おやじネットワークにおける行事等には費用がかかると思うが、どこから出ているのか？ また、巷ではPTAの持ち方が負担であると言われているが、活動状況はどのようなものか？
- A 行事の参加者から集めたり、主催するおやじネットワークの人たちも寄付金を出したりしている。またPTAや学校からも一部補助を出している。
- A 学校の環境整備や文化祭でのグッズ販売など、PTAはかなり活発に活動してくれている。

## 研究協議概要

協議の柱を、「各学校における地域との連携した取組について」と、「組織的な運営体制を構築するための工夫」の2つに絞り、3～4人でグループ協議を行った。協議後、各グループから各校の取組や工夫・課題等の発表を行った。

### <主な取組・工夫>

- ・サマースクール（生徒向けの学習会）を開き、教員、地域、学生などが分担して学習を教えている
- ・隣接している大学と連携し、大学生が学習を教えたり、支援級とのふれ合いを行ったりしている
- ・職場体験を中心に地域とかかわる機会をつくっている
- ・地域のスペシャリストを呼んで講演会を開いている
- ・メール配信で保護者のスクールボランティアを募っている
- ・PTAのなり手が減少しているため組織を縮小化している
- ・避難訓練をPTAや地域と協力して行っている
- ・PTAとともに祭りのパトロール、地域清掃、校内の修繕を行っている
- ・隣接の小学校へ中学生が学習・合唱指導を行っている
- ・6年生の授業・部活動体験、小学校への出前授業を実施
- ・校内の除草作業を地域の農家や漁師に手伝ってもらっている
- ・同窓会が清掃や炊き出しを行っている
- ・地域と協力して防災マップをつくったり、祭りなどに参加して地域の町づくりに生徒が協力したりしている
- ・年間行事の中に地域の行事を組み込むことで役割分担を行っている

### <課題>

- ・地域団体との打ち合わせが平日の勤務時間外や休日になっており、働き方改革には相反している
- ・行事の準備・後片付けを教員が行わなくてはならない
- ・教員の入れ替わりも多く、教員の温度差が生じている
- ・教員の負担を軽減するために縮小化を考えているが、これまでの伝統があり難しい
- ・PTAのなり手が減っていると同時にPTA行事への参加者が減っている
- ・少子化による連携の変革が必要である
- ・地域の高齢化によって連携が難しくなっている
- ・落ち着いた時代に地域と密な連携が必要なのかを疑問視する教員も増えている
- ・時数の問題が生じ、行事の精選・見直しが必要である
- ・組織的に動けていないため、担当者の負担が大きい
- ・各校の教育活動の目的に沿った取組なのかを見直す時期にある

## まとめ概要

現在、学校が抱える課題が複雑化・多様化する中、学校だけではなく社会全体で子どもの育ちを支えていくことが求められている。一方で、地域との連携が強まることで教職員に負担が強いられている現状も見過ごすことはできない。教職員の働き方改革が叫ばれている昨今、連携の縮小化や統合・効率化は必須である。その際、学校の教育活動のねらいと家庭・地域の願いを一致させ、子どもたちにどのような力をつけていきたいのかを第一に考えた地域・保護者との連携が大切になってくる。新学習指導要領の実施に向けて、各校で地域・保護者とのかかわり方の見直しを行うために大いに参考となる提案であったと考える。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 国語部会

## テーマ

## 『主体的で対話的な「読むこと」の指導』

### 提案概要

#### ・提案テーマ設定の理由

新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が求められている。当校では「学びの共同体」という、4人グループでの活動を取り入れ、他者との対話を通し、学びを深めることを目的とした教育実践を行っている。本校の実践が国語科の中で求められる「主体的かつ対話的な活動」につながると考え今回提案した。

#### ・具体的な提案内容

扱った単元は、光村図書三学年「作られた物語を超えて」。この説明文を読み、文章の要旨を捉え、内容をグループでレポート化していくという活動を行った。学習指導要領では、「書くこと」「読むこと」に関連したものになっている。

三学年の実践に向けて課題意識を確認しつつ、一・二学年時には、年間計画に工夫をしながら系統的な指導を行った。一学年時は、「どこが文章の中で大事なのか分からぬ」という「論説=説明文」に苦手意識をもつ生徒が多くいた。そこで、新聞の投書を要約する学習活動を取り入れ、教師が投書を要約した文章を穴埋めするという活動から要約の練習を始めた。要約するときには、どのように内容を削るのか、文章の中心的な部分と付加的な部分の違いは何か等を指導した。その後、「幻の魚は生きていた」という説明文を読み、文章の要旨を捉え、内容をレポート化する活動を行った。一学年時では、書きすぎだったり、省略しすぎだったり、レポート化するときに「どこは残して、どこはいらないのか」という判別がまだできていないことが分かった。

レポートは、4人グループで作成した。生徒たちは全員でそれぞれのレポートを見て、文字ばかりだと見にくいやつや、要約は長すぎず短すぎず、要点を押さえて適当な文章量で書く大切さに気付くことができた。その他にも、一学年時では説明文だけでなく、物語文でも場面ごとに20字以内で要約する活動や字数制限を設けて書く練習を多く取り入れた。

二年時では、新聞の投書を150字以内で要約する活動を行った。要約させる前に文章中の大切な部分に線を引かせ、隣同士で確認した後に要約した。この練習を何回か繰り返した後、お互いに違う記事を読んで、自分の記事の内容を相手に伝える活動に発展させた。どんな内容なのか簡潔に話す力=要約する力がつかれたと考え取り入れた。

このような一・二学年の学習の積み重ねを経て、今回三学年の実践に至った。本単元の一時間目は、目的意識をもって読み進められるように一学年時の振り返りを行った後、自分が大事だと思うところに線を引き、文章の要旨は何かを個人で考えた。二時間目からグループ活動を開始し、4人で本文を序論・本論・結論に分けて全体で確認し、その後要旨をグループで確認した。ここからグループごとにレポートのまとめ方の構想を練り、どこを書いて、どこは書かなくてよいのか等の意見を出し合ってレポートにまとめた。指導者は、机間指導で様子をうかがったり、質問に答えたり、助言したり等の指導を行った。生徒たちがどの程度にまとめられるか心配であったが、一学年の実践時よりも要点を捉えてレポートにまとめることができたグループが多くみられた。一学年時では、ただ文章を書くだけで、見やすい・分かりやすいとは言えないものだったが、今回は、大事な言葉だけを抜き出したり、四角で囲んだり、矢印で示したり、文字の太さを変えたりする等、変化や成長がみられた。今回も一学年時同様、全グループのレポート用紙を冊子にして配布し、お互いに比較できるようした。気付いたことなど全体の意見を拾いながら文章を整理し、要旨の確認を行った。最後に、要旨に対する自分の意見をまとめさせた。要旨にそって自分なりの考えを書くことができた生徒が多くいた。

## 質疑応答

- ・「グループ活動中の評価基準について。読むことの評価について確認したい。」  
グループ活動は個々の見取りが難しい。テストで振り返って評価している。
- ・「既習したものでは、読むことの評価はできないのではないか。」  
応用問題も取り入れて対応している。
- ・「150字の要約にかかる時間はどれくらいか。最低限書いてほしい内容についての指導はあるのか。」  
最初は15分～30分ほどの時間がかった。最低20分くらいは時間を取り、隣の子と見合ったり、お互いに添削したりという活動を通して、自分の捉えられてないところに気付かせた。学習の経験の積み重ねで、添削の時間もだんだん短くなっていた。内容については、全体の場で「こういうところは書いてあつたほうがよいね」といった確認は行った。

## まとめ概要

グループ協議では、年間指導計画及び評価計画の改善、グループ活動・個々の評価はどうしているのかなどについて話し合がもたれた。個人の意見・考え・実践などを付せんに書いてもらい、その後意見の共有を行った。

助言者の話では、以下のような話があった。

新学習指導要領のテーマは「つながり」。ぜひ先生方につながっていってほしい。教育現場では教員が不足しており、先輩教員がいない現状がある。例えば、「主題は説明文に使わない、物語文を使う。」というようなことを、気付いた先生から声をかけてほしい。

年間指導計画は、子どもたちの実態を把握し、育てたい力を明らかにして計画を立てるべきである。

自分なりに考えた教材を実践する際、年間指導計画を工夫して取り入れることはとてもよいので、積極的に行ってほしい。最近、新聞をとっている家庭が減っている。きれいな日本語が掲載されている新聞に触れる機会を取り入れることは国語の力をつけるという意味で価値がある。投書は社会をタイムリーに反映している点でもよい。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 社会部会

## テーマ

## 『問い合わせの設定に着目した授業づくり一生徒の「知りたい」を引き出すためには』

### 提案概要

新しい学習指導要領で提起された、授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」について話合いを重ねてきた。特に「主体的な学び」を議論の中心に据えてきた。それは、「主体的な学び」こそが「対話的な学び」や「深い学び」を可能にする要素だと考えるからだ。生徒が「知りたい」「考えてみたい」と思っていなければ、仲間と共に考えを広げ、深化させるような学びは期待できないだろう。

それでは、「主体的な学び」はいかにして可能なのか。そもそも主体的な学びは、「興味や関心をもっていること」、「見通しを持って粘り強く取り組んでいること」、「自分の学びの振り返りができる」と説明されている。このように分解して捉えれば、その実現のために、3つのアプローチが浮上てくる。

- ① …学ぶことに興味・関心をもたせるアプローチ
- ② …見通しをもたせて、困難が生じても粘り強く取り組ませるようなアプローチ
- ③ …学習活動を振り返って次につなげさせるようなアプローチ

このうち、今回の話題提供では、1つ目のアプローチである「学ぶことに興味・関心をもたせるアプローチ」について提案したい。具体的には、「問い合わせの設定」を工夫することである。授業は「問い合わせ」によって展開され、生徒の興味・関心を左右する。私たちは「問い合わせの設定の工夫とは具体的にどのようなことか」や「(その)授業ではどのような問い合わせの設定が効果的か」などを話し合い、実践を行ってきた。

### 生徒の「知りたい」を引き出す問い合わせの設定

「問い合わせの設定について、どのような工夫があるだろうか。アメリカの「ARCSモデル」をベースにして考えてみる。人間の学習意欲は、注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(Confidence)、満足感(Satisfaction)の4要因によって高めることができる。そこで、問い合わせの設定をこのモデルに当てはめて考えると、次のような大きな方向性が導かれる。

要因	基本的な方針	問い合わせの設定の工夫
注意(Attention)	学習者の注意を引き付ける。	問い合わせに学習者が「なぜだろう」と考えるようなインパクトをもたらせる。あるいはそのタイミングを計る。
関連性(Relevance)	学習者と授業内容の関連性を認識させる。	問い合わせを、学習者のニーズや日常経験と結び付ける。
自信(Confidence)	学習者に「自分でもできる」と認識させる。	問い合わせの難易度を適切にコントロールする。答えが一様ではない、その生徒にとって答えがありえる問い合わせをつくる。
満足感(Satisfaction)	学習者に満足感を与える。	問い合わせを探求した結果得られた知識・技能が、後の学習で活用されるように、意図的に問い合わせをつくる。

### 質疑応答

Q 基礎基本の学習の定着をどのようにするのか。アメリカでの実証はどのような結果になったのか。

A 基礎基本の学習は興味・関心を引き出し、自ら学んでいく学習意欲を育てていくことで、定着していく。アメリカでも、今だ、実証段階である。

Q 高校入試での設問とのズレをどのように解消していくか。

A 今後、高校入試自体も変わっていく。アメリカでも課題になっているのではないか。ヨーロッパでは、入試制度自体がシフトしている。

Q 知識と思考・判断を結び付けるにはどうしたらよいのか。

A 思考判断に使われる知識をリストアップしていく。計画的にプランニングされた内容を行うことで解消できるのではないか。

Q 生徒自らが出てくる「問い合わせ」では、単元の目標が変化してしまうのではないか。単元構想との違いが出た時にどのように対処するのか。

A 生徒が出てくる「問い合わせ」を予想して立てている。準備予測がとても大切になってくる。

Q 予想したものが、違っていたら。満足感が得られないのではないか。

A 毎回の授業で満足感を得られる授業はやっていない。予想が外れた生徒への対応として、肯定的に声掛けをしていく。

Q 発問のねらいを伝えているか。

A 「ARCSモデル」については生徒に伝えていない。教師自身が把握し、「問い合わせ」の予測準備をし、計画的に「問い合わせ」を設定している。

### グループ討議

特に課題などは設けず、質問形式で行った。

Q 「問い合わせ」や「疑問」が多く出たら、時間が足りなくなってしまうのではないか。どのようにコントロールしているか。

A クラスによって食い違う問い合わせてくる。ねらった「問い合わせ」が出てこなかった時には、教師が先導し、「問い合わせ」をコントロールする。また、キーワードを増やしていく等で対応している。

### まとめ概要

ARCSモデルとは学習意欲向上モデルであり、生徒の動機付けを促すために我々教師がどのように工夫し、チェックするためのものである。今回の発表では、「問い合わせの工夫」というところだけに着目しているように思われるが、実は「自分のこととして課題を捉えられるか」、「学んできたことが自分の将来に生かせるか」、「学びのゴールが明確になっているか」、「自己調整して個人が達成できる問い合わせの設定になっているか」というARCSモデルすべてを網羅することができている。このことは、主体的・対話的で深い学びの部分ともつながっており、学習指導要領の実践と捉えることができる。

生徒自身が出す「問い合わせ」は、さまざまな広がりを見せるが、最後には、設定された「問い合わせ」に戻ってくるように意図された授業になっていた。これは新学習指導要領で言われている「理解に向かう学習の過程」とも重なっている。学習指導要領には、単元ごとに「問い合わせ」が設定されており、この「問い合わせ」を生徒の実態に合わせた設定にする必要がある。

歴史的分野での「問い合わせ」の設定にとって注意しなければならない点は、以下の3点にまとめられる。一つ目は「歴史的な見方・考え方を働かせているか」をチェックしていくことである。二つ目は、我々教師がいかに生徒に適切な「問い合わせ」を仕掛けていくことである。三つ目は、見通しをもって学習に取り組むことである。また、生徒が振り返りやすい問い合わせになっているのかも重要な点である。これらのこと踏まえたうえで、適切な「問い合わせ」の設定を行い、授業を実践していくことが大切である。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 数学部会

## テーマ

『一旦解決された問題やその解決過程を振り返り、試行錯誤する中で思考を深める数学科の授業づくり』

## 提案概要

提案地区の、研究員としての取組で、「問を見出す子」＝「主体的な子」に育てるにはどのような手立てが必要か考えてきた。そこで、生徒が課題を解決するために試行錯誤する思考のプロセスを「見える化」することを大切にする授業づくりを意識した実践を行ってきた。生徒が「なんでそう考えたのだろう」と疑問をもち、その疑問解決のために試行錯誤するときの思考のプロセスを教師側が価値付けしてあげることで、生徒は課題解決に意欲をもって取り組むのではないか、さらに別の課題に取り組むときも同じような手順を利用し、課題解決へのアプローチを図り、自ら考える生徒になるのではないかと考えてきた。こうして、問い合わせを見出す生徒の姿を価値付けし、その思考のプロセスを共有することで他の生徒たちも問題に取り組む際のヒントとして活用し、自ら考えるための仕掛けと捉えた。その中で生徒の考え方を見える化(価値付け)するためのキーワードとして9つのことをあげて研究している。その中でも、誤答から問題を深く捉えることに価値付けし、問題解決の過程を振り返り、「どうしてそうなるのだろう」「本当に正しいのだろうか」とより深く考え、思考を高めることができる授業づくりに取り組んできた。日々の授業の中でも、出された課題に対して取り組むことはできても、解答するとそれで終わりになってしまい、一旦解決された問題やその解決過程を振り返る生徒は少ないことからも、このテーマを設定した。

1年生4章 比例と反比例(全20時間)の18～19時間の時間を使って、速さが異なる2人の目的地に到着するまでの様子が描かれたグラフから、同時にゴールするためにはどうすれば良いかという課題を与えた。様々な解答が出る中で、19時間目にそれを、誤答も含め検証する活動を行った。

この授業実践を通して下記の成果が見られた。

- 柔軟な考えをして、2人の走る様子をグラフに表すことができた。
- 2年時の1次関数で学習するグラフの傾きに着目することができた。
- 誤答を扱うことで、「どこで」「何を」間違えたか試行錯誤し思考を深めることができ、解決の過程を振り返ることの重要性に気付くことができた。

## 研究協議概要

解決された問題やその解決過程を振り返り、試行錯誤する中で思考を深める題材はどのようなものがあるか、についてグループで話し合いを行った。

- この題材は、最初からグラフで考えることを主眼に置かれているが、何もないところから考えさせてもいいのではないか。そこからグラフの良さに気付かせる。
- 図形の性質の証明(証明の方法はいろいろある)
- 1年生の文字式の導入のマッチ棒の問題(いろいろな考えがある)
- 計算問題でも意識できるのでは、間違っていたら全部消す生徒は振り返ることができていないのではないか。
- 図形の角度を求める問題(星形5角形やブーメラン型)
- 二次方程式の利用で解に根号が付く場合、どちらかが条件を満たさないケース

## まとめ概要

新学習指導要領が告示され数学科学習指導要領の目的に問題解決の過程を振り返って評価・改善しようとする態度を養うと書かれている。生徒の立場からすると「なぜ振り返るの、次行こうよ」「振り返り活動って何をするの」「わからない私には振り返るものがないよ」「この方法でできたから私はこれでいいよ」という生徒もいる。それゆえに授業者としては、その目的、タイミング、方法、題材、提示の仕方などを熟慮しなければならない。ときには、ちょっとした声掛けが振り返りになったりすることになるのである。

本年度は関数分野の比例と反比例について発表をした。研究協議の中でテーマに値する活動や題材が多く出されたことで非常に有意義な時間であったといえる。今回の研究発表と研究協議で得たこと、指導要領の目標につながったことなど実際の授業で実践してくれればと思う。

# 概要報告

実施期日	8月5日（月）
部会名	中学校 理科部会

【テーマ】『個人実験による科学的な体験や自然体験をいつそう充実させる指導を通して学びに向かう力の育成を目指す』

## 提案概要

新学習指導要領の学びに向かう力を考えたときの課題として「生徒がどれだけ体験ができるのか」ということを前提に今回の提案である「個人実験」が有効だと考え実践した。

4月のアンケート調査では理科が好きな生徒が30%以下だったのに対し、実験が好きな生徒は66%という結果が出た。しかし、その中で、化学実験は44%と他の分野に比べ劣った結果だったので、今回は「化学変化とイオン」の単元の「中和」についての個人実験をすることにした。

個人実験は2回行った。1回目は「中和をつくる」内容で、グループで予想を行い、個人で中和滴定、グループでまとめた。2回目はそれを踏まえ「中和と発熱」について個人実験を温度変化の記録と共に行った。その結果として、「理解が深められた」「主体的にできた」という積極的な感想が出た。しかし、苦手意識が強く個人実験を不安に感じる生徒もいるので教員のフォローが必要である。

また、個人実験は設備面、準備面で大変なので、各教員の得意とする分野で且つ学校の設備があればカリキュラムマネジメントの一つとして考え、行ってもらいたい。

## 質疑応答

### 1. 質疑応答

Q 「ピペット操作で気を付けたことは？」

A 「10mLタイプのプラスチック製のスポットを使うと良い。（綺麗で先の尖った駒込ピペットが生徒分あると良いのだが…）また、数値よりも中和することが目的である。」

Q 「関心意欲と知識理解の定着は？」

A 「確実なものはないが、時期的に入試問題を解くときに「これ授業でやったことがある！」という感覚が芽生えていた。」

### 2. 研究討議での意見

#### (1) 生徒の実態把握についての現状

- ・学校全体でのアンケートや教科別のアンケート等を年度初めと終わりや学期ごとに行っている。
- ・各単元の始めと終わりに行う。単元の始めではコンセプトマップの作成をし、興味を引く工夫をしている。

#### (2) 個人実験のメリット・デメリット

メリット…記憶に残る、共有する責任感、「できた」という経験(意欲)

デメリット…教員の準備・片付けの負担、安全性、進み具合の差

#### (3) 実践可能な個人実験

熱気球、重曹の量を比較したパンケーキ、カタバミで10円玉磨き、手羽先の解剖、鉄粉や銅粉を薬包紙に包んだ線香花火、ストロー笛、密度(電卓可能にする)、肺のペットボトル、再結晶

## まとめ概要

主体的な学びをするために、3年間を見通し、単元ごとにどこでどのような実験をするのか、ポイントを明確にする。また、教科横断の視点をもちながらも、既存の物を生かす工夫が大切である。実験にあたっては、生徒と教師の人間関係をしっかりと構築することが重要である。しかし、理科教員は頑張れば頑張る分だけ危険のリスクも伴うので安全面の確保をしっかりと行ってもらいたい。



# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 音楽部会

テーマ 『音楽が持つ力～様々な授業実践を通して生徒に「音楽の持つ力」を感得させる工夫～』

## 提案概要

音楽には人を動かす力がある。その力を日々の授業でどのようにすれば伝えることができるのかというテーマで研究を行ってきた。今回は卒業式に注目し、限られた時間の中で歌詞の内容や曲想を感じ取らせながらどのように指導をしているか、そして、音楽を通してどのように生徒の心が変化していくのかなどに着目して研究に取り組んだ。卒業式に向けての実践を通して、音楽にはどのような力があるのかということをもう一度見直す機会とした。

まず、市内の10校で、卒業式や関連行事でどのように音楽がかかわっているかを調査した。卒業式と3年生を送る会などでも各学校で必ず合唱がある。毎年学校の伝統で同じ曲を歌い継いでいる学校もあれば、年度によって曲が変わっている学校もあった。その中で、「大地讃頌」や「旅立ちの日に」は多くの学校で歌われていることが分かった。このような調査を踏まえて、生徒たちに、歌詞に注目して記入するワークシートを共通で使用した。

### <実践例1> A中学校…在校生の取り組み

「旅立ちの日に」の合唱を通して、在校生が卒業生に向けて感謝の気持ちをどのようにして届けることができるのかを考える取組をした。以下が4つの取組である。

取組1…卒業式の歌について考える、取組2…パートリーダー講習会

取組3…1・2年生合同練習、取組4…卒業式後の振り返り

卒業生に向けて、歌でどのような気持ちを届けたいのかを整理することによって、生徒の合唱の質も高めることができた。特に、最後の「いま わかれのとき～」の部分では在校生と卒業生の思いが一つになり、感動を呼ぶ合唱となつた。ワークシートからは、3年生と一緒に歌うのは最後だから必死に歌ったという感想もみられた。音楽を通して気持ちを届けようと一生懸命になった瞬間があったことがわかる。音楽がなければこのような感想は出てこないだろう。音楽の力が見えた部分である。

### <実践例2> B中学校…生徒が創作した合唱曲「輝く」の合唱

3年生が作詞作曲した合唱曲を、「3年生を送る会」で発表した。教師の主導ではなく、卒業を意識し始めた生徒の「自分たちの思いを表現できる曲を創りたい」という意思を、教師がバックアップして実現した。歌詞は3年生全クラスの生徒に、中学校や仲間、卒業をイメージできる詩（言葉）の募集を呼びかけ、数多く集まった言葉を学年委員が集約、選択した。同時に作曲担当の生徒がメロディを書いていき、伴奏担当の生徒が編曲・伴奏譜を作成した。最終的には音楽科の教員が協力して合唱譜の完成となった。発表後の生徒の感想からは、「とても良いものができるので、素晴らしい思い出になった。」「この歌が今だけでなく、後輩たちに受け継がれたら素敵だと思う。」という言葉があり、自分たちだけのオリジナルソングを創り、自分たちの思いを歌で伝えられたことの喜びが感じられた。

今回初めて卒業式にクローズアップし、他校の様々な取組をお互いに知る良い機会となった。また全校で共通の内容のワークシートを使うことにより、卒業式の歌を通して生徒が歌や合唱をすることの意味を認識することができた。今回「音楽が持つ力」とは何か、に着目してみたが、最初は消極的であった生徒も周りに感化されて歌うようになつたり、気持ち一つで合唱に変化が起つたりと、音楽には大きな力があるようだ。この力で在校生が卒業生へ気持ちを届けたり、卒業生が自ら創作した曲に思いをのせて届けたりすることができた。今後は、生徒が互いの思いをより深く共感できるようにすることが課題である。

卒業式は直前の練習だけで完成するものではなく、中学校生活3年間の集大成である。歌詞の内容を考えること、曲想をとらえて歌うこと、ハーモニーを感じて歌うことなど、継続して指導していることが卒業という舞台で実を結ぶ。このことを胸に留めて、日々の授業が充実したものとなるように取り組んでいきたい。

## 質疑応答

- ① 各学校での卒業式への取組についてグループ協議のうえ、全体で情報共有をした。
- ・卒業式の取組は各校で様々な実態がある。参加形態も、在校生は2年生しか出ない学校があつたり、2年生の有志だけの参加だったり、1年生は学級委員しか出ないというところもある。歌う曲数も1曲だけであつたり、3曲と

群読など多いところもあったりする。提案では、生徒が作詞作曲に取り組んでいたが、器楽やリズム創作はやっているが、歌詞をつけるというところまではやっていないという学校が多かった。

・卒業式では呼名に時間がかかるため、卒業生の合唱はひな壇に登らずにその場で後ろを向いて歌っている。生徒が主役なので、やはり一人ひとりの顔が見える合唱にしたい。移動に時間がかかるよう、座席などを工夫していきたい。

・卒業生の合唱は、それまで伝統的に歌っている曲とその学年が選んだもう1曲、在校生は毎年固定という学校が多かった。曲目については生徒に選ばせるのも良いが、最終的には教員が決定するほうが良いのではないかと思う。卒業学年に音楽科の教員が所属していないときは、歌の練習を多くの時間指導できないこともある。冬休み前から練習を始めたりして、早く音がとれるように進めている。生徒主体でパート練習などができるように、パートリーダーや文化的行事委員などに、合唱祭が終わったら次は卒業式の歌の練習だという意識づけをして、通年で取り組ませるのが良い。

・全校の合唱があつたり、在校生だけの歌があつたり、学校によってさまざま。3年生の特別日課になったときに音楽科教員がどれだけ時間を使えるかが大切になってくる。

・3年生を送る会がない学校もある。3年生は特別時間割があつたり、総合の時間などを練習に当てたりできるが、在校生はそういうわけにいかない。どこにウェイトを置いたらよいのか難しい。提案の中のB中学校の実践には衝撃を受けた。伴奏を担当する生徒にはかなり音楽的素養がないと厳しいのではないか。最後のところだけ教員が和声をつけて手伝ったとのことだが、その先生の技術もすごいと思う。

② 以下のテーマについて意見交換を行った。

Q：こんな練習をしたら効果的だった、など、合唱でどんな工夫をしているか。

A：授業の中でも、生徒同士で「こうしよう」とか「もっと声出そう」などと声をかけ合うほうが効果的。合唱委員が学年やクラスの中で中心となってくれると、周りの生徒もリーダーが頑張っている姿を見て「頑張ろう」と思ってくれる。リーダーたちに教員側からそのように仕向けることも大切。

A：1番と2番の間の間奏をどんな思いで聞くかなど、歌うことだけでなく曲全体として考えさせている。

Q：3～5時間の中で卒業式の合唱にどれくらいの時間を当てているのか。その中でどんなことを見取っているのか。

A：3年生は1月から5時間くらい。パート練習中の様子を技能で見ている。

A：合唱祭で歌った曲を卒業式でも歌うので、卒業式のために新しい歌を練習することはしていない。

A：卒業式で3曲歌う。1曲は合唱祭の学年合唱。あとの2曲は新しい歌で、授業では1月くらいから4時間くらい取り組む。あとは特別時間割でなんとか間に合わせている。

### まとめ概要

音楽の授業時間数は2・3年生では3～5時間と限られた時間だが、音楽科は入学式、合唱祭、卒業式など、学校教育の中に大きくかかわっている。卒業式の合唱は音楽科が頼られるところが大きく、各学校で、在校生の参加形態や合唱曲の選曲なども含め様々な状況があることが分かった。自分で抱え込むのではなく、当該学年や学校全体で協力して卒業式の合唱をつくっていくという姿勢が大切である。

合唱の授業では、学びとして何を学んでもらうのか、学習の目的をもっていることが大切である。共通事項の中の強弱のことや綻を合わせること、歌詞の内容や、曲の背景のこと、作者の思いなど、全部扱うのは難しくても、1つだけでも柱があると学びとして成立する。卒業式の合唱には3年間の音楽の学びがあらわれる。生徒たちが主体的に、今まで学んできたことを生かしてつくりあげる形が理想である。合唱委員などの組織やパートリーダーたちを育成していくことも有効であり、教員だけが教え込むという状況を防ぐことができる。

卒業式における合唱は、卒業生、在校生ともに自分の思いを伝えるための素晴らしい手段である。これからも生徒たちが音楽の力を感じながら心に残る合唱の発表ができるように、日々の授業を大切にし、指導の工夫をしていきたい。

# 概要報告

実施期日	8月5日（月）
部会名	中学校 美術部会

テーマ

『「学習意欲を高める学習指導の在り方」 - 鑑賞と表現を相互に関連させて -』

## 提案概要

テーマである「学習意欲を高める」ため生活の中での美術の役割について常に意識させられる指導を心がけている。今回のテーマを基に「自分のオリジナルマークを作ろう」という題材名でデザインの分野の授業研究、発表を行った。学習意欲を高めるためスライドやパワーポイントなどのICT機器を上手に使い、生徒の興味を湧かせる指導をしている。オリジナルマークを制作する授業の導入として、生徒の身近にある市町村のマーク、市章や村章をクイズ形式で鑑賞させた。

クイズにもルールを設け、生徒と教師、生徒同士でコミュニケーションを取りながら鑑賞するスタイルだ。答えがわからってもすぐに答えない。このようなルールを設けることで一人でも多くの生徒にひらめくチャンスを与えることになる。答えのわかった生徒にはヒントを考えさせ、まだわからない生徒が少し考えてわかるヒントを要求する。このように何度かクイズを出していくうちに、簡略化されたマークから市町村の名前や、イニシャルを見つけ出すことができる。形の単純化や省略、強調など、様々なタイミングで自然と生徒が鑑賞する機会が設けられる。さらに、勉強のできる、できないではなく、発想力やひらめきで答えることができるため、勉強を苦手としている生徒も積極的に答えることができるという利点がある。

例えば、本市の市章のようにシンプルな形の中に、様々な思いや願いを込めていたことを知った生徒は、自分のオリジナルマークを考える際に、自分らしさや、好きな物から連想するなど、考える種が多くできる。

導入で鑑賞をさせた後は、自主的な学習を促すため、宿題として企業のロゴマークを調べさせ、考察や調べた結果などをレポートにまとめさせた。自分の興味のある企業やブランド、一人ひとりが異なったものを調べるため、一クラスでも多くのマークを鑑賞することができた。

これらの過程を経て、デザインのアイディアスケッチを行った。「単純化」と「省略」を意識して考えられるよう助言を行なながら考えていく。

今回の研究授業の成果として、生徒も教師も楽しみながら導入ができ、授業の良いスタートを切ることができた。結果として、意欲の向上を図ることができたこと、オリジナルマークを考える過程で「自分らしさとは何か」と自分に向き合う時間ができたり、友人に聞く様子があつたりと自己理解につながる題材であったこと。さらに、授業の感想には、一生懸命考えたことで、著作権がある意味について考えることができた生徒もいた。テーマに沿った学習だけでなく、教師がねらいとしていたことにまで気付ける生徒がいたことが大きな成果である。

課題として、評価観点の明確化、模倣やパロディーにならないための指導の仕方、また、オリジナルマークを考えた後のスタンプで失敗してしまう生徒もいたため、デザイン画を生かせる素材や題材が他にあったのではないか検討する、などである。

今回、鑑賞と表現を相互に関連させることで、教師も楽しみながら行うことができ、それが結果的に生徒の深い学びにつながる研究授業となった。また、こちらの意図しない場面でも生徒自身で表現と鑑賞を行き来しながら学習を進めることができており、鑑賞と表現を切っても切り離せない関係であることを改めて確認することができた。

## 質疑応答

Q：スタンプの難易度は少し高めなので、ステンシルも一つの選択肢としてあるのではないか。しかし、スタンプにすることで今後も自分のオリジナルマークを残せるので、制作の流れとしてはとても良いものである。今後、制作したスタンプをどのように活用していくか教えて欲しい。

A：制作したスタンプは、今回制作した本にしおりに押したり、ファイルの表紙に押したり、生活の中に美術を取り入れ、美術の役割を常に意識できるようにしていくことを目指したい。

## 研究協議概要

- 鑑賞と表現を相互に関連させている題材について、グループ協議を行った。
- ・デザインや工芸の題材は、今回のように導入で鑑賞してから制作に取りかかることが多い。
  - ・絵画の分野では、制作後に有名な作家の絵を鑑賞させることを目指したい。
  - ・導入時に作家の作品鑑賞を行う。
  - ・「付せんタイム」という時間を設け、生徒相互の鑑賞時間を作る。
  - ・鑑賞という時間をあえて取らなくても、生徒自身が発見し鑑賞の力を付けることができるための工夫やタイミングを考える。
  - ・美術の授業中にインプットとアウトプットの関係が常に行われ、鑑賞と表現が相互の関係しないことはない。
  - ・横須賀地区では美術館と連携し、小学生や中学生が美術館に行く機会を設けている。
  - ・テーマを絞って鑑賞させることで、目的が明確になって生徒の作品にも表れる。
  - ・鑑賞の時間は、表現するためには必要なことだが、時間数の問題もあり工夫が必要である。
  - ・ワークシートの評価の難しさ、色々な鑑賞の仕方をこちらが見取る必要がある。

## まとめ概要

学習指導要領の解説P160に書いてある、美術科の目標には、「造形的な見方・考え方を働かせる」とある。教師はこれを達成させるための指導が求められる。そのために、生徒が造形的な見方や考え方から反れていくようであれば、修正する必要がある。

例えば、今回の導入時に行ったクイズでは、ある生徒が「〇〇市」という答えに導かせるため「〇〇地区」「ターミナル駅」などのヒントを出した。しかし、社会科や総合的な学習の時間ではないため、形や色などの造形的な見方をするように促すことが必要である。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 保健体育部会

## テーマ

## 『体育理論と実技を関連付けた深い学びを目指した授業』

### 提案概要

体育理論で学習した知識が、他の運動領域でも生かせるよう、単元計画の工夫や指導方法の工夫を行い、多様な関わり方と関連付けることで深い学びを目指すこととした。

- ① 体育理論の「運動やスポーツの多様性」の学習を通して、「する」以外のかかわり方を学んだ後、体育理論での学びが、その後の実技の学習の中で実感することができたかについて振り返りを行った。
- ② 本研究における実技の学習では、球技（バレーボール）及び長距離走を実施し、バレーボールでは、技能向上のみならず、審判法や順位の出し方などを学ぶとともに、自分達でリーグ戦を運営する学習を実践した。
- ③ 生徒の振り返りから
  - ・得失点差による勝敗について理解することで、応援に対する熱が高まり、見る楽しさを味わえるようになった。
  - ・実際に審判を経験することで、責任感や支える意識が高まり、公正・公平な態度の重要性が理解できた。
  - ・「わかること」と「できること」の学習を通して、技能の理解が深まった。
  - ・日常のテレビ観戦においても、選手だけでなく、審判の動きなどにも興味をもつようになった。
- ④ 長距離走の授業では、走り終えて疲れている状態にも関わらず、パートナーのために伴走したり、積極的にラップタイムの計算をして伝えたりするなど、以前にも増して、より質の高いサポートができるようになった。
- ⑤ 本研究の課題としては、体育理論の学習を年間計画のどこで行うとより効果的かについて再検討することである。また、教師及び生徒ともに、授業に対する達成感は高かったが、生徒が行う振り返り活動に多くの時間を要してしまった。今後は、保健分野においても、実技と関連付けることにより、深い学びの実現を目指したい。
- ⑥ 3学年では、「文化としてのスポーツ」と実技を関連付け、パラスポーツ（ブラインドラン・ゴールボール）を経験する学習を実践した。生徒は年齢や性、障害などの違いを超えて交流する文化としてのスポーツの意義について学ぶことができ、大変好評であった。

### 質疑応答

- ① これまで審判法などある程度の知識を実技とともに指導してきたと思うが、今回、体育理論と位置付けて指導したことにより、実技の授業が今までとどのように変わったのか具体的に教えてほしい。  
→審判や自分の役割を果たそうとする姿勢が強くなり、責任感が高まったり、生徒の「する」以外の学習活動が充実した様子がうかがえた。
- ② 振り返りの時間には、どれくらいの時間を要したか。  
→実技テストの待ち時間を活用し、20分程度確保したり、冬休みの宿題にしたりした。

### 研究協議概要

- ① 生徒の自主的な活動を促すために、グループでの協働学習などを行っているが、単元の前半に知識を学ぶ機会を設けることが必要だと感じた。
- ② 今後、保健と実技を関連付けた学習に取り組む必要性を感じた。
- ③ 今回の提案を通して、実技の授業に入る前に体育理論を学習することにより、その後の授業の質が向上する様子が理解できた。
- ④ 単に体育理論を実技と結びつけることが効果的ではないと思う。どの題材をどの実技と組み合わせるかによって、その有効性も変わってくると思う。
- ⑤ 体育理論は、学習指導要領の中で、3単位時間程度はあるが、どのように組み込むと有効であるか考えたい。
- ⑥ 実技と体育理論を関連付けることの重要性を再確認できが、どのように評価に反映させるかが課題である。

- ⑦ 実技教科における知識の学習については、日頃から行っているが、体育理論としての位置付けては行えていない。
- ⑧ 体育理論と実技を関連付けることを今後より一層意識することが必要だと感じた。
- ⑨ 体育理論と実技を関連付けることのよさは理解できた。一方、技能の習得に十分な時間をかけることができなくなってしまうことが考えられる。

### まとめ概要

- ① 今まで体育理論に焦点をあてた研究が少ない中、これから的新学習指導要領全面実施に向け、非常に重要な視点を提案していただいた。体育理論での学びが、より実技の授業の質が向上させたり、生涯スポーツに親しむ態度を養うことにつながったりすることが考えられる。
- ② これから保健体育学習においては、「する」「見る」「支える」「知る」についての内容をしっかりと触れながら、「見方・考え方」を働かせる学習活動を大切に指導することが重要である。
- ③ 現在、体育理論及び保健分野と体育分野を関連付けた学習については、大変重要であると考えられている。学習指導要領の241<sup>シテ</sup>・242<sup>シテ</sup>に例示が5つ示されているので参考にしてほしい。
- ④ 運動やスポーツの「する、見る、支える、知る」などの多様なかわり方を理解させることは重要であるが、あくまで授業では、「する」を中心とした指導計画を立ててほしい。

## 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 技術・家庭部会

### 【テーマ】

### 『生徒の主体的・対話的で深い学びを実現させるために』

### 提案概要

新学習指導要領では、技術分野の目標として、見方・考え方を働かせた実践的・体験的な活動を通して、資質・能力を育むということが書かれている。技術分野の場合はこの見方・考え方を働かせることで社会からの技術に対する要求や、安全性や自然環境に関する負荷、経済的な負担等の相反する要求に折り合いをつけ、最適な解決策を考えることが技術ならではの学びとなると示されている。このような学びを実現するためには、主体的・対話的な学習を通して、多くの意見や情報を元にして、自らの方向性を決める力が必要となると考えた。そのため、『生徒の主体的・対話的で深い学びを実現させるために』というテーマのもと、「主体的・対話的」という要素を授業に取り入れ、目標を達成させるための工夫を行った。

主体的・対話的な学びを実現するためには、言語活動の充実が必要だと考えた。しかし、それは単に周囲と会話をして意見を交換するということではなく、技術の場合には既存の製品や建造物などから、社会のニーズを読み取るなど、「聞こえない声」を読み取る力も必要だ。授業の中で、「なぜ、スマートフォンは普及したのか」と生徒に聞いてみたところ、日ごろ使っている製品について様々な視点で考え始めた。次回の授業までに、多くの子供たちはそれぞれ家で自発的に調べてきたようで、様々な情報のシェアが活発に行われた。このように、情報を多くの「もの」、または多面的な方向から受信する力が必要で、それを授業の中で伸ばすことができれば、生徒はより多くのことを気付き、気になったことを自ら調べることにもつながる。

次に「会話の中から情報を集める」ことについての提案である。まずは教師と生徒の間の会話のやり取りについてである。例えば生徒が、「先生、板を切っていて、最後に板が割れてしまいました」と生徒が言ってきたとき、最後まで集中して教師が聞くことができているかが重要である。おそらく自分は「板が割れた」という言葉を耳にしたあたりから、割れた板の修復方法を頭に浮かべながら話を聞いてしまう。確かに話を聞き終わった段階で返答の準備ができていることにはなるが、実は「話を聞く」ということには、実はなっていない。考えを先回りさせて返答して時間短縮するのでは、生徒が「自分の意見を伝え、考える」というプロセスを踏むことができなくなってしまう。しっかりと話を聞いた後で、「どうやって切ったの?」や、「どうしてそうなってしまったんだろう?」と聞くようになるだけで子供たちが自ら考えを深めていくきっかけになると思われる。また、自分の話を聞いてくれた分だけ相手の話も聞くという、「振り子の法則」というものもある。生徒が話しやすく相談しやすい雰囲気を授業の中で作っていくことも重要であろう。

授業の中では、生徒の中で道具管理代表や掃除管理代表を決め、生徒に代表の存在を実感させるよう意識して活動を行っている。認識されることで代表になった生徒は意欲的に仕事を行うようになった。また、そのように授業を行う中で、2年、3年と学年が上がるにしたがい、生徒の中から「チェックリストをつくろう」や、代表を3人にして役割を分担したいなど、よりよい活動にするための工夫案があがってくるようになつた。

このような実践を行い、アンケートを実施したところ、「先生は発表を大切にしてくれる」や「先生はほめたり励ましたりして自信をもたせてくれる」などの項目が大きく改善された。

## 質疑応答

- ・年間計画の生物育成の時間が短いが、どんな活動を行っているのか。  
⇒最初はしっかりと知識を身に着ける授業を行っている。植え付けが終わった後は、年間計画には記載されていないが、材料と加工の授業の時にも授業開始後の前半部分で観察や振り返りを書くなどの活動を行っている。
- ・題材の学習過程において、評価から改善の活動を行うには何時間必要か。  
⇒できれば1回目と同じだけの時数確保したいが、現状困難なので、少しの修正にとどめて2、3時間で行いたい。
- ・評価改善の改善を、題材の終わりだけでなく、例えば作業工程の節目など、題材の途中にもつくるようにすれば大きな失敗などもなくなり、時数を節約できるのではないか。  
⇒参考にしたい。
- ・班活動の分け方はどのようにしているか。  
⇒出身の小学校、フォローできる生徒、話せる生徒など、バランスを考えて教師側が決めている。

## 研究協議概要

- 5つのグループに分かれ、「言語活動を充実させる年間を見通した取組について」研究協議を行った。
- ・見方・考え方を働きかけた話し合いができるように、テーマ設定に気をつけている。
  - ・リトルティーチャーとして班長を中心とした活動を行っている。班長に作業のやり方や手順を説明し、班員に説明しながら作業をさせる。
  - ・わからない生徒は席をうごいてアドバイスをしてもらうことを許可している。
  - ・話し合い活動をさせるときには答えが決まっているものを話合うのではなく、多面的にとらえることができるようなことについて話合わせるようにしている。
  - ・設計の場面で企画書をテーブルに置いておいて見せ合うようにしている。発表時間の短縮にもなる。
  - ・設計も言語活動。身近にあるものの回路図を考えて、実際に回路を組んで試す活動を行っている。
  - ・早めに課題や作業が終わった生徒には腕章をつけさせ、ほかの生徒の指導役にしている。そうすることで振り返りの内容の視点がより深いものになっていた。

## まとめ概要

今回の実践の中では対話的な学びについて2つの目線があった。一つ目は授業規律である。先生の聞く姿勢が大切だと言っていたがそれはそのとおりで、子どもから気付きや意見を引き出すために、先生が話しそぎず、聞くことを意識することは非常に重要であろう。

2つ目は授業改善の視点である。一斉授業ではなく、ペア学習やグループワークなどを取り入れることで、先生が説明するだけでなく生徒が説明する機会が増える。例えば説明をするのではなく、立場を決めて議論することや、生徒の考えをもとにポスター作成をして発表をする等の活動も考えられる。対話的な学びは思考力・判断力・表現力等を育てる学びであり、現行の指導要領では設計や評価活用の場面にあたる。

言語活動については、「社会や生活を支える技術」の場面では学ぶ中で様々な知識・技能を発散させ、「技術による問題解決」では、解決に必要な知識・技能を収束させる。そして「社会の発展と技術」では他者の意見を踏まえて自分の意見を語るような実践を行ってほしい。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 外国語部会

## テーマ

## 『Writingで自己表現力を高めるための工夫』

### 提案概要

自分の住んでいる市で海外の友だちに紹介したい場所を3か所選び、その場所の歴史や人気の理由などについて紹介する英文を書くという活動をした。この活動を行うにあたり、少しでもライティングに対する苦手意識を克服できるよう、新出文法事項がある際には3文程度の英作文を書く練習をするように心がけてきた。また教科書のライティングの課題に、英文の数の目標を定めて取り組んだ。その結果、数の目標を達成できる生徒は数多くいたが、日本語で書きたい内容を考えてしまうため、なかなか英語で表現することが難しいというケースが見られた。そのような際には、既習の文法事項を復習しながら、少しずつ英文にできるように指導をしてきた。また、コンピューター室を使って資料を集めたり、固有名詞など難しい単語は家で調べてくるように指導したりした。そのような中で、生徒同士での教えあいや学びあいの姿が見られるようになった。

今回の活動では、既習の文法事項を用いて、各自が選んだ3か所の紹介文を9文作成していればB評価とした。A評価を得るには10文以上作成する必要であるが、自分たちが暮らしている市の紹介であり、その中から自分で紹介したい場所を選んでそれぞれ3文作成すれば、Bの目標は達成できる。そこで、全員A評価獲得を目標として、既習の文法事項を使って英作文の活動ができるよう、取り組ませたいと考えた。

### 質疑応答

Q：英文を書く際の数の指定について、数で評価を分けるとき、文法的なミスがない8文と文法的なミスがある9文の場合、数で評価をするのか、内容で評価をするのか。

A：いったん数で評価をつける。内容はプラスのポイントとして心にとどめておき、いざというときに評価にプラス点としているようにする。また、生徒に紹介する時に、良い例として内容が良いものを紹介する。数の条件を満たしているが内容としてA評価に達しないものもあったが、次につなげていくようにしたい。

Q：コンピューター室を使用して授業を行う頻度とそのメリットは何か。

A：スピーチの原稿を書く際、わからないところや調べたりないところを調べる時間として1時間とった。和英辞書だけだと、調べきれない生徒がいた。パソコンを使用して調べる方法に慣れが必要だと感じたため、調べ方等を事前に伝えてから活動したほうが良かったかもしれない。

Q：学びあいの学習をすると、苦手な生徒が得意な生徒の英作文を見てまねをしてしまう場合があり、自分で取り組んだところとアドバイスを受けて直してよくなったりとこころの2つに分かれてしまう。自分でどこまでできるか自分の力を試すことも大切だと考えており、自力で取り組むことと学びあいの学習をすることとのバランスが難しいが、どのように取り組んでいるか。

A：自分の力だけで書くことは難しいと感じる生徒が多い。グループで取り組んでも、自力で取り組める生徒は少ない。聞いてくる=興味がある、関心があると捉えるようにしている。答えをそのまま伝えるのではなく、ヒントの形で伝えることができるよう意識している。

### 研究協議概要

ライティング指導をする際に工夫していることについて、各グループで協議を行ったあと、全体で共有した。

#### ○評価について

- ・評価は難しく、評価ありきの活動になってしまいがちだ。生徒の伝えたい気持ちを大切にしたい。
- ・1年間で3回ほどライティングの課題を設ける。評価をしない場合もある。評価をしなくても行事の際に展示することを伝えると、一生懸命取り組む。
- ・他の生徒に教えてもらったとしても、まとまった文章として表現するには文法等を理解していないとできないのではないか。そこはまず評価をして、本当に使えるかどうかは普段の授業を通して判断できるはずだ。

- ・定型文だけを使って作文した文章の評価とプラスアルファで努力をしたが、ミスがある英作文のどちらの評価が高いのか。

あまりにも×がつくと、書く意欲が失われるため、できるだけ点数をあげるようにし、言葉かけもしていくことが大切なのではないか。授業で取り組むものはそこでは評価をせずに、定期テストで評価をすることもできる。

- ・評価について、ALTにも加わってもらうと良いのではないか。
- ・既習の文法事項を使って書けたかどうか、内容として優れているかどうかなど複数の観点で評価していくことが必要なのではないか。

#### ○課題の設定や取組方法について

- ・「留学生の知り合いにメールを送ってみる」など英語を使う必然性を伴う課題の設定が大切。
- ・Student Teacher制度を活用。課題を終えた生徒が、他の生徒の課題をチェックしていく。Student Teacherに選ばれた生徒が、意欲的に取り組むようになった。
- ・英会話活動を帶活動として取り組み、それをライティングにつなげて文字におこしてみるという活動に取り組んでいる。書くことに慣れるためには有効と考える。
- ・英作文の活動を行うときの生徒への言葉かけが大切。もっと簡単な言い方はできないかと考え、1年生の頃から同じ日本文を何パターンの英語で言えるかなどを考えていくとやりやすいのではないか。
- ・家ではスマートフォンなども単語を調べる際に使用できるが、授業ではあえて紙の辞書を使うようにしている。
- ・ライティングは難しいため、日頃の取組が大切。書くことに慣れさせることが重要だ。
- ・身近なことなど、生徒が書きたいと思う内容を設定することが大切。毎日の授業で書かせることを大切にし、それをフィードバックしていくことが必要だ。
- ・課題の例として、絵を見せてそれを英語で説明するという内容で、英作文リレーというものに取り組んでいる。
- ・日々の授業でライティングの活動を取り入れるようにしている。毎日3行英作文に取り組んだり、習った英文を使ってやり取りしたりしている。生徒が知りたいと思ったときにすぐに調べができるように、必ず英和と和英の両方の辞書を使えるようにしている。

#### まとめ概要

ライティングの力をつけるには、大切なことが大きく分けて3つある。

##### ①授業展開

幅広い分野の知識や言語能力を身につけ、思考力・判断力を養うことができるような授業づくり。

##### ②1つの語に執着しないこと

- ・日本語から英語にすることにこだわりすぎず、知っているシンプルな単語を使うようにする。
- ・音声や絵などの材料が必要。

##### ③日頃の授業でまとまった英文を書く活動を行うこと

- ・普段の授業の中で、30語程度を使ったまとまりのある英文を書く活動をする。
- ・対話的な活動がスムーズになるように、グルーピングの工夫やStudent Teacherの活用も必要。
- ・音声→文字という流れを大切にする。話す活動を何回も繰り返したあとに、話した内容を書き残すことが大切。インプットが豊富ないと、アウトプットすることもできない。活動を行う前に、内容に関して調べてくることを事前に生徒に伝えておくことも大切。
- ・教師がデモンストレーションを見せ、どういう表現が使えそうか、生徒に考えさせることもできる。
- ・語彙について、小学校では600～700語に触れてくる。しかし、音では耳にしてくるが、読み書きまではやらない。その部分のフォローも必要になってくる。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 道徳部会

## テーマ

## 『「考え、議論する道徳」の推進～教科化に向けて～』

### 提案概要

令和元年度、特別の教科道徳になるにあたり、「考え、議論する道徳」への授業改善が求められている。「主体的・対話的で深い学び」に通ずるところもあるが、まだまだどの授業でも講義型の授業になりがちである。どのように取り組むべきかを模索している段階ではあるが、教科化に向けて、「考え、議論する道徳」の授業を行うための取組について提案する。

#### (変革の4つの柱)

- ① 「年間計画は学習部にお任せ」からの脱却  
→使える年間計画にするために、行事やそのときの生徒の実態を参考に、それに見合った計画の見直しを行う。  
グランドデザインを、校内研究とタイアップして作成。育てたい生徒像の共通認識。
- ② 「担任の想いごとに違う内容項目、教材、授業スタイル・発問・ワークシートで行われる授業」からの転換  
→教科書導入に向け、副教材を学年ごとに購入した。学年会で授業の検討を行い、指導案作成を学年内のローテーションで作成し、授業を担任で行う。
- ③ 「特別活動」的「道徳」で、授業をつぶさない  
→教員向けに伝達講習を行い、道徳と特別活動の区別ができるようにした。全職員が道徳教育にかかわっているという意識をもつようになった。
- ④ 「感想を書かせて終了」にしない  
→3学年共通の振り返りシートの導入。これにより、道徳的諸価値にもとづき、多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身のかかわりの中で深められているかを、毎回同じ視点から振り返り、評価できるようにした。

### 質疑応答

- Q 「あたたかい聴き方」「やさしい話し方」のステップとは、各授業でどのように使われているのか。授業ごとに、目標や到達度を決めて使っているのか？
- A 今、自分はどこまで達成しているのかを年度初めに確認させている。また、全ての学習活動の中で、教員ごとに目標をもたせている。
- Q 1 授業形態について、一斉指導を行っている意図は？グループ活動での実践例は？  
2 「励ます評価」であることが望ましいと思うが、「価値の評価をしてはいけない」といわれている。教員としてどのような声かけをして、「励ます評価」をしていいか良いか。
- A 1 教材に合わせて変わっている。グループ活動や、コの字型の隊形で行うこともある。（教員が入らない口の字型の時もある。）  
2 自分なりの考え方、自分の言葉で伝えることができたことに対して、「励まし」の声かけをしている。

☆ 今回の検証授業について、他にどのような発問や展開が考えられるか、いくつかのグループで話し合いを行った。

- ・自分の理想から強い意志がうまれるが、朝原選手の行動や言動を知ることで、誰にでも逃げたくなる時があることに気付く。そこについて考えることで、自分事として捉えやすくなるのではないか。
- ・「意志を強くもつことは大切だ」では、すでに「知っていること」で終わってしまうのでは。子どもたちが自分と照らし合わせたところで授業を終わらせていきたい。
- ・道徳は「個人内評価」。生徒の考えがどんなに綺麗事であっても、「努力の大切さ」などを、この授業の中で実感として気が付いたのなら、そこを評価してあげたい。
- ・ホワイトボードを活用し、全員の意見を拾いやすくしている。

### 研究協議概要

【協議の柱】 各学校の評価について、どのように行っているか、情報交換を行う。

- ・道徳部会で文例を考えている（2学期頃から検討）。授業ごとにワークシートなどにまとめ、評価に備えている。
- ・評価ありきで授業するということが、子どもに対してどう授業で還元していくかというところで矛盾が出てしまうところがある。道徳は、教師と生徒が同じ土俵に立ち、話し合い活動ができる唯一の時間。一つの価値に向かっていく時間の共有を大切にしたい。
- ・定型文を使っていこうと考えているが、その内容については各学校で検討中。自分だけでなく、友達の意見を大切にし、考えの変容が見られた点などを大事にしていきたい。
- ・各学期などで、今までやった授業の中で一番印象に残ったものなどを振り返り、それをもとに評価をしていきたい。
- ・昨年度、評価を試しにやってみた。前期・後期で一枚ずつ振り返りを書き、それをもとに評価する。先生によっては一から文章を考えていたが、学期末の多忙さから自作は難しいだろうということで、定型文を作成した。
- ・自己評価をもとにした評価、定型文を使った評価、という点が多くの市町で共通している。
- ・自由記述も考えたが、学期末の業務量と、管理職のチェックの多忙さを考えると、定型文を用意したほうが良いのではないか。
- ・テンプレートが在るにせよ、無いにせよ、振り返りシートの用意はしたほうが良いのではないか。毎回感想を書かせて、ポートフォリオでまとめさせている。
- ・今回の検証授業は、「強い意志」という内容項目でやるのは難しかったのでは。常に指導書通りではなく、より多面的・多角的な見方が出来る内容項目を選ぶのもありだろう。
- ・「強い意志」については、小学校の段階で理解できている。中学校ではさらに、簡単に実行出来るか？という、「人間理解」「他者理解」についても触れていきたい。

### まとめ概要

グランドデザインを作る過程の中で、生徒の実態を教員がどう捉えていて、3年間でどう成長させるかなど、職員の共通認識をもつことができた。結果、道徳の授業や生徒の様子について話合う時間が増えた。その反面、時間的な余裕が無く、道徳の授業検討にかける時間が足りず、指導内容やねらいにズレが生じてしまう点が、課題として考えられる。

# 概要報告

実施期日	8月5日（月）
部会名	中学校 総合的な学習の時間部会

## テーマ

### 『地域に貢献する総合的な学習の時間』

#### 提案概要

##### ○実践に向けての課題意識

新学習指導要領※においては、学校教育目標を踏まえ、総合的な学習の時間を通して育成を目指す資質・能力を示すことが明示されている。しかし、多くの学校が学年ごとに学習内容を設定しており、3年間を見通したねらいが希薄になっているのが現状である。また、人とかかわることが苦手な生徒が少なくないことから、人とのかかわりを通して新たな人間関係を構築する機会をもたせたいと考えた。そこで、学校の特色を生かし「地域」をキーワードの一つとして、3年間の学習を計画的に積み上げられるよう、年間指導計画の見直しを図ることとした。

##### ※新学習指導要領との関連

#### 第4章 第3 指導計画の作成と内容の取扱い

##### 2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

- (7) 学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。

##### ○実践の概要

- (1) 学校や生徒の実態を捉え、学校教育目標を踏まえながら総合的な学習の時間のグランドデザインを作成することで、総合的な学習の時間を通して身に付けさせたい資質・能力を明らかにする。
- (2) 「地域を知る、地域に貢献する、地域に発信する」をキーワードに、系統性のある年間計画を立て、実践する。
- (3) 学年及び学習開発部において、総合的な学習の時間における学習が、目標を達成するための活動として適切であったかなどについて検討し、次年度の計画に生かす。

##### ○具体的な取組

###### 〈1学年〉「講座学習とグループでの探究学習」

- ・前期に、市役所で一般市民向けに開かれている「市民学び講座」を活用し、資源循環課、社会教育課、社会福祉協議会の方などを講師として招聘し、講座学習を行う。
- ・後期に、自分たちが興味・関心をもった内容について、調べた内容をより効果的に他者に伝えるために、動画にまとめて発表する。

###### 〈2学年〉「職業体験学習」

- ・学区の様々な事業所等で体験学習を行う。

###### 〈3学年〉「個人課題追及学習」

- ・個人で興味をもったことについて調べる。

###### 〈全体〉「地域ふれあいデー」

- ・地域の方を講師に迎え、空手・フラダンス・紙飛行機作りなどの体験学習を行う。

生徒の実態として、進んで学習に向かう意欲はあるが、自ら課題を見つけたり、表現したりすることが不得手で、積極的に地域や社会とかかわろうとする姿勢が十分ではない。そこで、実生活から見つけた課題を解決することで、社会に貢献する生徒の育成を図るために、3年間を通して学習を積み重ねられるよう、学校独自のグランドデザインを作成した。しかし、1学年の探究学習では、探究するところまで追究できたのか、また、発表の仕方をどのようにしていくべきか、2学年の職業体験学習を「地域とのかかわり」というキーワードとどのように位置付けていくかなど、検討すべき課題が多い。3学年の個人課題については、従来の個人テーマの設定ではなく、大テーマとして「本市の未来を創ろう」と示し、本市の未来のために自分が何ができるかを追究していく「プロジェクト学習」を設定した。まず、生徒に「学びのプラン」を配付して学習の目的や流れの確認をすることにより、従来の個人課題追及学習と比べて、地域との関連性のあるテーマが増えてきた。

現時点では、課題設定までの段階だが、教員が学校教育目標や総合的な学習の時間で身に付けさせたい力を意識し

ていることから、目指す生徒の姿が明確になっているとともに、「学びのプラン」を提示することで、生徒が見通しをもって安心して学べるようになっている。また、地域に貢献していくためにはどうすれば良いかを考えながら課題設定する姿が見えてきた。今後の流れとしては、それぞれが立てた課題に対して、現地調査を行い、それらをまとめ、発表へと向けて準備を進めていく。さらに、よりよい表現の仕方、発信の方法について検討していく。

発信の方法では、校内の発表に留めず、地域に返していく方法について模索中である。また、総合的な学習の時間と他教科との横断的な関連付けを図り、生徒に「学んだことを生かすことができた、役に立った」という実感をもたせたい。改めて学習活動を見直し、教師自身がおもしろいと思える、また生徒にとっても魅力的な総合的な学習の時間を目指し、全職員一丸となって取り組んでいきたい。

#### ○成果と課題

成果としては、改めて学校教育目標を意識し、身に付けさせたい資質・能力を考えたことで、3年間の学習の見通しが明確になったことが挙げられる。さらに、地域の人材を活用し、講座学習や職業体験、体験学習を行う行事（地域ふれあいデー）を実施することを通して、教職員、生徒が地域との結びつきの大切さを感じることができた。

一方、総合的な学習の時間で身に付けさせたい資質・能力が、生徒の実情や学区の地域性など、学校の実態に即しているかについて、さらに見直しや検討が必要である。また、学習開発部を中心とした総合的な学習の時間の担当職員による他職員への発信も十分であるとは言えない。今後、各校の特徴を生かした総合的な学習の時間を、生徒及び教職員にとって、より魅力的なものにしていくためには、全職員が共通認識をもって取り組んでいくことが必要である。

#### 質疑応答

- ・生徒たちから、「得た知識（学んだこと）を周りの人にも伝えたい」という声は上がったか。  
→「自分が学べて良かった」という感想はあったが、「地域の方に知ってほしい」というような感想が出るところまでは至っていない。
- ・発信の仕方については、具体的にどのようにしていくのか。  
→学区の小学校では、地元の商店街とタイアップした商品（醤油・味噌など）を販売している。そのような経験を積んできた生徒にとって、より良い発信の方法についてはまだ模索中である。
- ・総合的な学習の時間の時間数の不足はないのか。  
→限られた時間内で授業計画を立てているため、不足するということはない。しかし、時間がほしい時に捻出できず、他教科との時間割変更に苦労することはある。
- ・「話しかた・聞きかた」を学ぶというのは、国語との教科横断的なかかわりがあるのか。  
→国語との横断的なかかわりではなく、総合的な学習の時間の中で、話すときや聞くときのポイントを学んでいる。2年生の国語の授業では、フリップの使い方を学んでおり、そのことが総合的な学習の時間の発表時に生かされていると思う。

#### まとめ概要

生徒の既知の事実とのギャップ、そしてそこから生じる「知りたい」と思う気持ちが、総合的な学習の時間の学びのスタートである。自分が知らなかったことを「知りたい」と思う気持ちが、生徒自らの学びを深め、知識や技能が身に付くことで、自然と他者に「伝えたい」と思うようになる。これこそが、総合的に学習の時間における、「主体的・対話的で深い学び」であり、「発信」につながってゆく。

総合的な学習の時間は、領域ありきで授業を考えるのではなく、教師自身がおもしろい、楽しいと思えるような教材を選定していくべきである。そこで、日ごろから職員間で「この学校をどのようにしていきたいか」、「どのような子どもを育てたいか」（＝目指す生徒像）などについて話し合える環境であることが望ましい。その中から総合的な学習の時間で実践したいことのヒントを見出し、学校独自の「学びのプラン」を創り上げていかれるといいのではないだろうか。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 特別活動部会

【テーマ】『年間を見通した学級活動～第1学年 学年発表会(年間の活動の振り返り)』

## 提案概要

本提案は、『年間を見通した学級活動』を主題とした第1学年での特別活動の取組で、「学習指導要領の第3章、第1節の2学級活動の内容」に関連付けられている。クラス数の少ないいくつかの小学校から入学してくる生徒たちは、新しい人間関係の中で、本来の自分らしさや能力を表に出すことに躊躇することが多かった。そのことから学級活動や学校行事を通して、お互いの能力を認め合える雰囲気をつくることに重点を置き、指導を行ってきた。また、体育祭等の行事では全体を引っ張るリーダー的な存在の生徒にスポットが当たる傾向があるが、全体が上手く動いていくためには大多数のフォロワーの動きが重要なことから、リーダーの指示を理解して行動している生徒や、自分の役割をしっかりと果たそうと頑張っている生徒にもスポットが当たるように、様々な視点から評価し、多くの生徒の成果が見えるように意識して取り組んできたことが説明された。これらの点から指導目標として次の3点が設定された。1「お互いの性格や能力を認め合える人間関係づくり」、2「リーダーとフォロワーの育成」、3「一年間の成果を実感できる場の設定」で、いずれも学校教育目標を念頭においたものである。1年間の成長を学年全体で振り返るために、昨年度、1学年は3月15日に「学年発表会」として、学校行事や各教科の成果を生徒間で共有したり、保護者にも参観してもらう場を設けた。「学年発表会」につながる学校行事としては、5月の校外学習「絆week」、9月の体育祭、10月の文化祭を設定した。特に学級委員や、カラーリーダー、パートリーダーを指導していく中で、自分たちで創り上げる達成感を感じさせられるように意識した。3月の「学年発表会」では学級委員、生徒会執行部、カラーリーダー、パートリーダーを実行委員として組織し、企画・運営を行わせた。各教科の発表では、「総合的な学習の時間の職業調べの発表」「英語によるスピーチ」「体育でのダンス披露」「国語での小説展示」「社会での人物レポート展示」を行った。英語や体育では教科担当の先生から推薦してもらった生徒やグループが発表することで、普段は見られない他クラスの取組を見ることができたり、今まで気付かなかつた生徒の良さを知ることにつながった。実行委員によるスタンツでは、学年目標を意識させることや、2年次の宿泊学習のクラススタンツのイメージをもたせることを目的として取り組んだ。また、クラスごとのまとまりを表現するために群読発表を行い、群読の作成や練習など学級委員や群読リーダーを中心となって取り組んだ。最後の学年合唱では1年間の様々な活動の集大成として、パートリーダーを中心に新しい曲に挑戦させた。生徒の感想には「5月に設定された絆weekの時より全員の心がひとつになって群読や合唱ができるようになった」「指揮者をやるのは初めてだったし、最初はとても不安だったけど、みんなが自分の指揮を見て歌っている姿を見ると少し嬉しかった」等、成長や変容がうかがわれるものが多くあった。また保護者の感想では「職業調べは、よく調べられていて発表も静かに聞けていた。みんな真面目に取り組めていた。安心して発表できる雰囲気が良かった。」「入学当初の緊張感も抜け、のびのびと学校生活に参加している姿に成長を感じます。いろいろな企画を発想できる学年だと思うのでこれからも楽しみです。」という意見があった。

## 〈実践の成果〉

- ・1年間の成果発表の場をあらかじめ設定することでリーダーに身に付けさせたい力を明確にでき、見通しをもった指導を行うことができた。
- ・発表を行った生徒の中には大勢の前で話すことが苦手な生徒もいたが、成功体験によって自信につながった。その後の授業等でも積極的に発言する生徒が多くなった。
- ・発表を見ていた生徒は他の生徒の新たな一面や教科での頑張りを知ることができ、日常の生活の中でもお互いの性格や能力を前向きにとらえる雰囲気ができた。
- ・実行委員を中心に活動させることで、自分たちで企画・運営する力を育てるとともに、司会が上手な人や全体の企画を考える人など、それぞれがもっている適性に気付かせることができた。

## 〈今後の課題〉

- ・実行委員会を中心に取り組ませたが、生徒たちも初めての経験ということもあり教員主導になるところが多くかった。今後、学年が上がるごとに自主的な活動を意識し、自分たちで創り上げたことを実感できるように指導していきたい。
- ・これらの活動の指導や準備は学級活動の時間に取り組んだが、さらに良いものを創り上げたいという想いもあり、時には放課後の時間に行なうこともあった。そのため、ダンスやスタンツ、スピーチの練習などの指導や準備では、生徒と教員両方に大きな負担となることもあった。成績処理の時期や部活動などとも重なることがあるので、計画をきちんと立てて余裕を持った取組にしていきたい。

### 質疑応答

Q 時間の確保について

年間35週の中で45時間割り当てているが、どのような工夫をしているのか。

A 年間指導計画に基づき道徳や総合的な学習の時間とも連携して捻出している。

### 研究協議概要

#### 【協議の柱】

- ①特色ある学級活動の実践例について。
- ②学校教育目標と密接に関連付けられた実践例について。

#### 【協議内容】

①について

- ・グループエンカウンターによる取組  
(例)「サインを集めよう」・・・自己紹介を兼ねた学級開き  
「じゃんけん列車」・・・人間関係づくりと集団意識の向上を育む
- ・本来、どのエンカウンターを実践するかは、クラスの実態にあわせて選びたいところだが、実際は担任の負担を考慮するなどの理由から、学年全体で画一的に実施されているという課題点もある。
- ・生徒主導による学年集会の開催  
生徒が企画運営を担当し、クイズ形式によるクラスの紹介など、工夫を凝らした学年集会を実施している。
- ・表だった教師の指導は全体の生徒にはみえない部分で行い、生徒主体で動かす学年行事を開催している。
- ・修学旅行の班決めを、どのように決めるかも含めて、すべて生徒自身に決めさせている。
- ・リーダーの育成に関しては、誰をリーダーにするか、強いリーダーシップを発揮できる生徒のいる集団とそうでない集団があるが、いずれにしろリーダーとして自信をつけさせたい。リーダーの育成とともにリーダーを支えるフォロワーの指導も大切である。

②について

- ・体育大会などの行事にからめてキャッチフレーズを決めたら、それを意識して指導していく。
- ・普段は職員も意識していないし、生徒たちにも伝わっていないが、取組の時点で関連付けられていなくても、活動を実施した後からみると、学校目標につながっている。
- ・学年目標は各教科における指導していくこともあるが、学校目標はまだそこまでに至っていないという課題点が見られた。

### まとめ概要

学校教育目標に基づき、生徒に付けさせたい力を明確にしたうえで、年間を見通した特別活動の実践は、なかなかそこまでに至らない現状もある中で、とても有意義な提案であった。3月の学年発表会では、生徒の変容や成長の過程がみてとれ、発表のための活動ではなく一年間のすべての活動の過程が大切であることをあらためて認識することができた。

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、新学習指導要領の3つの視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を踏まえ、生徒たちにとっても価値のある学びとなるような特別活動の指導と実践を展開していくよう、これからもさらに研鑽を深めていくことが大切である。

# 概要報告

実施期日	8月5日(月)
部会名	中学校 特別支援教育部会

## テーマ

## 『特別支援教育からすすめるインクルーシブ教育』

### 提案概要

中学校の一組織である特別支援学級は、通常級の生徒との交流を行ったり、直接、間接的に校内の職員に特別支援教育への理解と啓発を促進したりする点から、インクルーシブ教育の推進に相応の責任を果たしていると考えられる。まず、インクルーシブ教育について、①特別支援教育とは、インクルーシブ教育構築のために不可欠である ②すべての子どもにとって、よい効果をもたらすことができるもの ③できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべき、という3点の確認を行い、市内各校の支援学級へのアンケートの集計をもとに、問題点や課題点等が挙げられた。アンケートの質問事項と回答は次のとおり。

#### ・交流及び共同学習のメリットとは

人間関係の広がりや支援学級生徒の学習に対するモチベーションの維持と向上、生徒間の理解の広がりや職員間の連携の深まり、等の回答が見られた

#### ・交流及び共同学習を行ううえでの課題は何か

急な時間割変更といった実務的な部分、学習内容が理解できないなどの実態に合っていない点、交流級担任の協力を得ることや、それぞれのクラスに付き添いきれない、といった人的問題など、様々な課題がある一方で、担任に理解があるので大きな課題がない、といった回答もあった。

#### ・インクルーシブ教育推進のために必要なことは何か

人的配置などの教育環境の整備、障害の有無にかかわらず個々に対する適切な支援を行うこと、共に生きているという意識、実感、など、環境面に関する課題とともに、精神性、意識といった課題が見られた。

以上のアンケート結果から、心のバリアフリーを考えながら実践発表が行われた。

### 実践①支援教室から全校への発信

交流デーの実施。夏休みを利用して、交流級の生徒に参加を呼びかけ、流しそうめんを実施。共に調理を行い、食事後はTボールなどで汗を流した。支援教室から全校へ発信し、全校を巻き込んで実践している。

### 実践②学校行事への参加方法の工夫

学校行事への参加は交流のチャンスと捉え、体育祭では、レーンのラインを一部見やすい色に変更してもらったり、参加の仕方を工夫したりと、柔軟なルールの変更をみんなで行い、交流級の一員として参加した。また、合唱祭では、全体合唱の指揮を支援級の生徒が担当したり、交流級で歌ったり、また、支援級で発表したりと、様々な参加方法で行った。

### 実践③通常級と支援級の教員間の連携

授業交流では、支援級の生徒が通常級の授業に参加する他、通常級の先生に支援級の授業を受けもってもらい、相互理解を深めた。また、支援級の生徒が通常級の授業に参加する際には、授業評価も作成してもらった。学年会議や生徒の情報交換の会議に参加をし、生徒情報の発信とその共有を図った。また、支援級に「～さん」をつけることに心の障壁はないかと考え、みんなで検討した。

#### 実践④教育相談コーディネーターの兼務（連携）

支援教育の専門性を發揮（共有）、連携していく、という点では、支援学級の担任が学校の支援コーディネーターを兼務することも有効である。特別支援教育をメインとした職員研修を年に3～4回程度実施し、職員間の連携促進と特別支援教育への理解と啓発を促した。

#### 質疑応答

質問：アンケート結果に「担任に理解があるので大きな課題はない。」とあるが、こういうことをすると上手くいった、等の例があれば教えてほしい。

回答：支援級の生徒が通常級に参加して、「こうすればこうなる」といった経験（成功例）を重ねていくことだと考える。先生方の困り感と一緒に考えることが、支援級への理解にも繋がると考えている。

#### まとめ概要

今回の実践発表では、インクルーシブ教育とは、学校全体の理解、連携がなければ成り立たず、一人ひとりの心のもち方も大きく、支援学級からは様々な場で発信していくことが大切であるとされた。しかしグループ討議の中では、実際に行動に移そうとすると、職員室に支援級担任数分の机が配置されていないことで、十分な情報交換の場すら整っていない学校や、人的配置が十分ではなく、交流の授業に付き添いきれない、といった課題も多かった。特別支援教育やインクルーシブ教育について、管理職を含めてさらに研修する場を設定してほしい、といった意見や、学校組織として取り組める環境作り（人的配慮、時間割、校務分掌等）から先行してほしいといった意見もあった。また、インクルーシブ教育は、支援が必要な子ども達のためのものではなく、学校経営の柱の中心に据えていくべきもので、そこから派生するユニバーサルデザインであるとか、だれにでも分かる授業であるとか、相互理解（相互尊重）であるとか、具体的な課題に取り組むべきでは、といった意見もあった。

今回の提案では、具体的な実践と共に、インクルーシブ教育とは何かという本質的な問い合わせ、深い考察をすることが不可欠であり、単純に教育の場を共有することだけではなく、障害の有無を問わず生徒同士が理解し、尊重し合えるよう、心理的な障壁を取り除くことが重要である、と提言された。

グループ討議では、各地区の課題や参考になる取組などが多く挙げられ、今後の支援教育に即役立つこと、共に考えていくべきことなど、有意義に話し合われた。今後も全ての生徒が健全で豊かな発達に資する取組をしていきたい、と締めくくられた。